

ディキンソンの捉えたエマソン ——伝記的事実に見る

武田 雅子

はじめに

これは、文部科学省の科学研究補助金を交付された研究の一環としてまとめたものである。

研究課題は「エマソンの知的宇宙と彼の時代—アメリカ・ロマン主義の文化史的考察」で、19世紀アメリカの知的リーダーとして時代に大きな影響力を持っていたエマソンの思考を、同時代人の問題意識を通して明らかにしようというものである。同時代人として取り上げられるのは、ホーソーン、メルヴィル、ディキンソン、ソロー、ホイットマンで、各人とエマソンの関わりを、それぞれの小説家、詩人、思想家を専門とする5人の研究者が担当する。筆者が割り当てられたのはこの内ディキンソンである。

ディキンソンは生前ほとんど作品を発表しなかったため、エマソンはこの詩人の存在を全く知らなかった。影響関係があるとすれば、エマソンからディキンソンへの一方的なものであった。「影響関係があるとすれば」と譲歩的表現をしたのは、それが正確にはかなりたどりにくいものだからである。ディキンソンはエマソンを読んでいたのだから、影響を受けたということは言えるのかもしれないが、それでは「如何に」となると、見極めがたい。二者の思想に似通ったものが見られたとしても、それは各人が独自に同じ時代精神とでも言うべきものに行き着いた結果かも知れないからである。

ディキンソンの詩の形式と内容の二面から、エマソンの影響を見る試みは、今までも決して多くはないが時になされている。同じテーマを扱った、ディキンソンの詩とエマソンの詩またはエッセーの比較を通して、そこに類似点と相違点を見るところがある。また、思想的に似通っていると思われる箇所を引いてきて、類似を指摘、ということは必然的に相違も問題にすることになる。こうした先行の研究を整理してみても、そこから見えてくるものがあるのではないかと考えたのだが、多くは断片的で、推測に基づいているのであった。これは、具体的に両者の関わりを示す証拠が余りに少ないからであって、影響を考えるなら推測するしかないのである。そう認識してみると、先行研究の整理に入る前に、ディキンソンがエマソンと関わったその数少ない事実、推測の由って来たところを整理する必要性も出てきたので、まとめたのが本稿である。

A. ディキンソン所蔵のエマソンの著作

ハーヴァード大学のホートン・ライブラリーにはディキンソン・コレクションがあり、その中には30冊ほどの書き込みのある書物がある。その内、エマソンの著作は、*The Conduct of Life*

(1861,1879), *Society and Solitude* (1879), *May-Day* (1867), *Essays* (1861) である。¹

次のBの項目の1で取り上げられる書簡の中でふれられた *Poems* も、ここに所蔵されている。目次の5つのタイトルには濃い“X”のマークが付けられていて、これはコレクションの他の書物には見られないものであるところから、この詩集をディキンソンに与えた際、ベン・ニュートンの付けたものと推測される。それらの詩は、“Each and All,” “The Problem,” “Goodbye,” “Woodnotes I,” “Dirge”である。この同じ本には、別のマークも付いていて、ディキンソンの使った他の書物にも見られる薄い鉛筆によるものなので、彼女のものである可能性が大である。これらの欄外につけたマークのある詩は、“The Sphinx,” “Each and All,” “The Problem,” “To Rhea,” “The Visit,” “The Rhodora,” “Woodnotes I”である。²

B. ディキンソンの書簡・覚書の中におけるエマソンへの言及

1) L30 (23 January 1850) To Jane Humphrey

... I had a letter — and Ralph Emerson’s *Poems* — a beautiful copy — from Newton the other day. I should love to read you them both — they are very pleasant to me.

ベンジャミン・フランクリン・ニュートン (1821-1853) はディキンソンの父の法律事務所にいた法律研究生で、彼女の文学の眼を開かせ、「何を読むべきか、どんな著者を賞賛すべきか、自然の中で何が偉大で美しいか、そしてあのさらに崇高な教え、すなわち見えないものを、そしてより高貴でもっと祝福された生命をまた信仰することを教えてくれた」(L153) とディキンソンは述べている。これはかなりエマソン的な発言かもしれない。

ニュートンはウスターで法律の勉強を続けるためアマストを去ることになり、記念に与えたこの本は *Poems* (1847年刊) である。「私の亡くなった先生は、私が詩人になるまで生きていたいと私におっしゃいました」(L265) と、ディキンソンは彼に言及していることからして、その人から送られた詩集がエマソンのものであるというのは、相当の意味を持つと言えるだろう。

2) L353 (about October 1870) To T. W. Higginson

With the Kingdom of Heaven on his knee, could Mr Emerson hesitate?

“Suffer little Children” —

「意味深な表現」(a cryptic remark)³とされていて、エマソンへの近親感と懐疑の思いの距離感という相反する気持ちが窺える。2行目は、超絶主義者のエマソンに対して、昔からの伝統のある信仰心から、キリスト教信者の抑制した答えを発したものとする。⁴

宛名人のヒギンソンは、1862年から、ディキンソンが手紙を出したことから終生文通を続けた。社会活動家、文芸評論家。

3) L436 (mid-April 1875) To Louise and Frances Norcross

I have only a buttercup to offer for the centennial, as an “embattled farmer” has but little time.

Begging you not to smile at my limited meadows, ...

コンコードの、独立戦争時に戦った市民を記念した『ミニットマン』像の除幕式は1875年4月19日に行なわれたが、手紙の宛名の二人は当時このコンコードに住んでいた。像の台座にはエマソンの「コンコード賛歌」が刻まれており、当日、本人の朗読もあった。ディキンソンの引用している語句を含む2行は“Here once the embattled farmers stood/And fired the shot heard round the world.”となっている。この年は、この詩からの引用が流行ったということである。⁵

4) L457 (spring 1876) To T. W. Higginson

I inferred your touch in the Papers on Lowell and Emerson – It is delicate that each Mind is itself, like a distinct Bird –

ローエルの *Among My Books: Second Series* の書評が1876年3月号の *Scribner's Monthly* に無記名で載ったが、筆者がディキンソンの推測どおりヒギンソンであることは確認されている。一方、エマソンの *Letters and Social Aims* 評は4月号に掲載され、これも無記名で、ヒギンソンによるものである可能性は大ではあるが、確定はされていない。

5) L481 (Christmas 1876) To Mrs. T. W. Higginson

I am bringing a little Granite Book you can lean upon. I hope you may not prohibit me. I have not asked Mr – Higginson's leave.

ヒギンソン夫人が健康を害していたことから、病気見舞いを兼ねたクリスマス・プレゼントとして贈られたこの書はエマソンの *Representative Men* (J.R.Osgood の改訂版。1876年刊) で、“To M C H from Emily Dickinson Christmas, 1876”の文字がある。ヒギンソンが妹アンナに出した12月28日付の手紙でこのことに言及している。

6) L486 (early January 1877) To T. W. Higginson

... I designed “Harold” to accompany Emerson, but Tennyson declines – like Browning – once so rare!

To wane without disparagement
In a dissembling hue
That will not let the eye decide
If it abide or no

is sunset's, perhaps – only.

Harold, a Drama (1876) はテニスン作。この書簡は内容の示す状況がはっきりわかりにくい。

7) L750 (30 April 1882) To Otis. P. Lord

... Today is April's last – it has been an April of meaning to me. I have been in your Bosom. My Philadelphia [Charles Wadsworth] has passed from Earth, and the Ralph Waldo Emerson – whose name my Father's Law Student taught me, has touched the secret Spring. Which Earth are we in?

宛名人のロードはディキンソンの晩年の恋人であったが、この書簡の時期、彼の健康が危ぶまれていた（ただし、この時は奇跡的に持ち直した）。ディキンソンにとって大切な友であった（恋人説もある）牧師、ワズワースは4月1日に、エマソンは4月27日に死去。

8) L794 (after Christmas 1882) To Mrs. J. G. Holland

Remember me to your Possessions, in whom I have a tender claim, and take sweet care of the small Life, fervor has made great – deathless as Emerson's "Squirrel" –

ここで言及されているリスとは、おそらく”Fable”に登場して、山と競うリスであろう。この詩は次のように始まる——“The mountain and the squirrel/ Had a quarrel.”

9) L823 (early May 1883) To Mrs. J. Howard Sweetser

I have long been a Lunatic on Bulbs, though screened by my friends, as Lunacy on any theme is better undivulged, but Emerson's intimacy with his "Bee" only immortalized him –

エマソン作 “The Humble-Bee” への言及。

10) L962 (14 January 1885) To Louise and Frances Norcross

Holmes's *Life of Emerson* is sweetly commended, but you, I know, have tasted that.

ここで言及されている『エマソン伝』の刊行は1885年であるが、1月中旬のこの手紙でもうお互いに読んだかのように記されているので、すでに前年には出ているのであろうか。いずれにしても、出版されてすぐ読んだことが窺え、関心の深さを示している。

11) L1004 (summer 1885) To Mabel Loomis Todd

I trust you are homesick. That is the sweetest courtesy we pay an absent friend. The

Honey you sent so far to seek, I trust too you obtain.

Though was there not an “Humbler” Bee?

“I will sail by thee alone, thou animated Torrid Zone.”

前々項9参照。原詩では“sail”ではなくて“follow”という語が使われている。

12) PF10

It must have been as if he had come from where dreams are born!

兄嫁スーザンに宛てて、エマスのアマスト訪問後に書かれたとされるメモに近いもの。自筆原稿はなく *The Life and Letters of Emily Dickinson* に採られている。エマスの訪問についての詳細は次の項目C参照。

ここで使われている表現に似たものが、1863年頃作られたとされる“A precious – mouldering pleasure – ‘tis –”(Fr569)においても、全28行の詩の24行目に出てくる。21行目から終わりまでを次に引用する。

He traverse – familiar –
As One should come to Town –
And tell you all your Dreams – were true –
He lived – where Dreams were born –

His presence is enchantment –
You beg him not to go –
Old Volumes shake their Vellum Heads
And tantalize – just so –

この“He”は詩の全体の2行目にある“An Antique Book”を指す。この詩における同様の表現の使われ方から、エマスについてのメモを解釈して、「エマスはディキンソンの町にやって来て、彼女の夢はすべて真実だと伝えに来た存在ではあったが、彼女は書物を読んで魅惑される方を選んだ（ので直接会うことはなかった）」とする説がある。⁶

13) PF116

“Tumultuous privacy of storm”

エマス作“The Snow Storm”からの引用。次に出てくるトッド夫人の娘で、ディキンソン研究者であるビングム夫人によると、お気に入りの詩だったので、便箋に写し取って引用符に入

れていたのを、妹のラヴィニアがトッド夫人に送った 1884 年 2 月 5 日付けの手紙の中に同封した、ということである。⁷

C. エマスのアマストでの講演、ディキンソンの兄の自宅訪問

1857 年 12 月 16 日に、エマスがアマストに来て、“The Beautiful in Rural Life” の演題で講演をした。これは、5 日前の 12 月 11 日にウェンデル・フィリップスの講演を嚆矢としたシリーズものの一環であったが、12 月 18 日付の *Express* 紙上では「講演は期待はずれで、言葉にも普段のエマソンらしさがなく、中身もごく普通の人間ならわかるような代物だった」⁸と評されたが、エマソンを客として迎え入れた、ディキンソンの兄夫妻にとっては興奮と感激のひとつだった。前年に結婚して、ディキンソン一家の隣の、父により新築してもらったエヴァーグリーンズ（常緑荘）に移ってきた二人には、先ほどのフィリップスそしてエマソンと相次ぐ名士の来訪が実に誇らしかった。このときの雰囲気をも自分の子供たちに伝える、兄嫁スーザンの思い出の記“Annals of the Evergreens” から引用する。⁹これからは、前の項目 B の 12 が、どのような状況で発されたかが窺い知れる。これによると、メモに残したのではなく、話したように書いてあるが、前者の場合でも後者のように表現することはありうるので、どちらとも決めがたい。

...Before [*Emerson*] came I grew almost nervous in my anticipation of the vision of our New England seer. For years I had read him, in a measure understood him, revered him, cherished him as a hero in my girl's heart, till there grew into my feeling for him almost a supernatural element; so that when I found he was to eat and sleep beneath our roof, there was a suggestion of meeting a God face to face, or one of the Patriarchs of Hebrew setting, or, as Aunt Emily says, “As if he had come from where dreams are born.” I remember very little of the lecture except a fine glow of enthusiasm on my own part, and an almost unconscious contempt for anything but Emerson and his tablelands...

この文からは確定的なことは言えないが、おそらくディキンソンは講演を聴きに行かなかっただろうし、隣家である兄のエヴァーグリーンズ（常緑荘）を訪れてエマソンと会見することもなかったろうと思われる。後者に関しては、招待されなかったということもありうるが、ディキンソンが来るはずもないと兄夫妻が理解していたのかもしれない。また完全に本人の意思で行かなかったという可能性もある。時期としては、彼女のいわゆる隠遁生活がかなり徹底していた頃であるし、いずれにせよ、ここに見られる熱狂といったものからは、かなり距離感をおいた心理状態であったと思われる。

なおエマソンの次のアマスト訪問は、1865 年の 10 月に「社会的目的」という演題での 6 回シリーズの講演を行なった際であったが、この時は記録がないので不明であるものの、おそらくエヴァーグリーンズを訪ねてはいないようである。¹⁰ディキンソンはこの年、4 月から 10 月まで眼

の治療のため2度目のボストン滞在中であった。

D. ディキンソンの詩の1つがエマソン作と擬される

—“Success”の詩をめぐる¹¹

ディキンソンは生涯作品をほとんど発表しなかったことで知られ、その姿勢が様々な解釈されている。発表した10篇といえども、すべて他人の手によるもので、明らかに意識的に発表しない道を選んだ詩人だからである。発表の場は新聞で、1篇は詩集の中に取りられたが、これもディキンソン本人の自発的なものではなかった。この詩の発表に関わってくるのは、ヘレン・ハント・ジャクソンで、彼女はアマストで少女時代をディキンソンと共に過ごしたこともあったが、二者の交遊はほとんどなく、成人してから、評論家のヒギンソンを通して新たに知り合ったと思われる。ジャクソンはH.H.として知られた文筆家となっていて、傾向はずいぶん違ったものの、無名の詩人ディキンソンを世に出そうと幾通もの説得の手紙を残している。

1876年、ボストンの大手の出版社Roberts Brothersが、“No Name Series”という匿名作家のシリーズを出し、ジャクソンも、ここに小説を発表した。彼女の提案でシリーズの最後に“A Masque of Poems”という詩のアンソロジーを出すことになり、ディキンソンは渋るだろうと承知の上で、ジャクソンは企画段階から「二重の匿名性の陰に隠れる」のだからと、寄稿を強く勧誘した(L476a)。ディキンソンが返事を出さないでいると、ジャクソンは直談判するべくアマストにディキンソンを訪ね、窮したディキンソンはヒギンソンに手紙を書き、角が立たないように彼の方から断りを入れてもらいたい旨依頼する(L476)。ところが、彼はジャクソンがディキンソンに小説を書くよう勧めたと誤解し、その線での返事として、気が進まないようなら無理に書くことはないと言った(L476b)ので、どうやらディキンソンはジャクソンに再び返事を出さないでいたようである。しかし、そのようなことで諦めるジャクソンではない—1年半後に「出版社にさえ秘密にするから」と催促する(L573a)。さらに続くディキンソンの沈黙に7ヶ月耐えたジャクソンはついに「私が暗記している“Success”を出版社に送っていいでしょう？」と迫る。最初は数篇と言っていたのが、次には1, 2篇となり、ここでは作品を名指ししている。実は、1878年の出版の日付からして、この時すでに印刷段階に入っていたようである。この年の暮れのジャクソンの手紙(L573c)から判断すると、ディキンソンはどのような形にせよ、とにかく同意はしたらしい。ジャクソンの方はほっとしただろうが、第1部の最後という特別な所にこの詩が掲載されたことをわざわざ述べて、何とか場を取り繕おうとしているのからすると、ディキンソンの同意は同意とも言えず、気が進まないことが明白なものであったと推測される。

出版社は、ディキンソンに完成した本を1部贈呈し、彼女はそれに礼状を書いたらしい。編集のトーマス・ナイルの次の手紙が残っている。

L573d

Dear Miss Dickinson You were entitled to a copy of “A Masque of Poets” without

thanks, for your valuable contribution which for want of a known sponser Mr Emerson has generally had to father.

I wanted to send you a proof of your poem, wh. as you have doubtless perceived was slightly changed in phraseology...

ここでこの手紙において注意すべきことは、出版に際して目論まれた、匿名の詩の作者当てゲームにおいて、このディキンソンの詩がエマソン作とされたということである。

Success is counted sweetest
By those who ne'er succeed.
To comprehend a nectar
Requires sorest need.

Not one of all the purple Host
Who took the Flag today
Can tell the definition
So clear of Victory

As he defeated — dying —
On whose forbidden ear
The distant strains of triumph
Burst agonized and clear! (Fr112)

もう一つ重要なことは、「僅かながら手を加えた」ということで、それを次に列記する。

2 who] that	8 clear] plain
3 a nectar] the nectar	12] Break, agonizing clear
4 sorest] the sorest	

これは以前、自作が添削されて新聞紙上に掲載された時に、「盗まれた」と感じたディキンソンにとって、とても「僅かながら」で済ませられるようなものではなかった。それにもともと詩にはタイトルもついていなかった。これを最後に、ディキンソンの詩で出版されたものはない。普通の無名の詩人なら、当時の有数の思想家でもあり詩人でもある人に自作が擬された名誉な出来事として記憶に残るであろうこの一件は、ディキンソンにとってはありがたいどころか、決して出版すまいとよりいっそう決心を固めさせる契機となったのである。

ところで、Roberts Brothers 社の編集者がエマソンの名を出したのは、たとえば次のような

書評 (*Literary World* 掲載) を見たからだろうか。発刊は奇しくも 12 月 10 日のディキンソンの誕生日に当たっているのが、彼女の心にも留まったと思われるのだが、“Success” といえど「改竄」の方が彼女にとっては印象的だったのではないだろうか。

If anything in the volume was contributed by Emerson, we should consider these lines upon “Success” most probably his...

ただし、エマソンに擬されたというような高い評価をディキンソンは喜んだだろう、またよく言われているような改竄よりも、発表そのものを拒否する気持ちの方が遥かに強かったという説もある。¹²

E. その他のエマソンとのかかわりを示す事例

1) ディキンソンの一つの詩の一部はエマソンの著作から (?)

If my Bark sink
'Tis to another Sea —
Mortality's Ground Floor
Is Immortality — (Fr.1250)

このディキンソンの詩の最初の 2 行は、ウィリアム・エラリー・チャニング (1817-1901) の詩 “A Poet's Hope” の最後の 2 行 “If my bark sinks, 'tis to another sea” から採られている。チャニングは、超絶主義者として活躍し、マーガレット・フラーの妹と結婚し、詩才をエマソンに認められて、『ダイアル』誌に寄稿し、無名のソローを世に紹介した人であった。そこで、ディキンソンは本人にも関心があったと思われるので、直接詩集を読んでこの箇所が印象に残っていたのかもしれないが、可能性としては、エマソンから引いてきたと考える方が遥かに大である。それというのも、これは、エマソンの著 *Representative Men* で取り上げられた 6 人の偉人の 1 人、「モンテーニュ」の章の一番最後で、1 行空けたあと、原詩 2 行を 1 行にして書かれているからである。非常に目立つ引用の仕方であるし、この書は、エマソンに言及したディキンソンの書簡の 5 の項目で取り上げたように、師と仰いだヒギンソンの妻に贈ったほど気に入っていたものであり、この箇所が印象深くディキンソンの心に留まらなかったはずがない。破格の文法はディキンソンの常なのであまり強力な傍証とは言えないが、原詩が “sinks” とあるのに、エマソンもディキンソンも “sink” と表記していることも念のため注意しておきたい。

2) ディキンソン宛のヒギンソンの書簡におけるエマソンへの言及

ディキンソンからのアプローチにより文通を始めたヒギンソンは、この不思議な人物への個人的関心と指導者として頼られた義務感から教育の必要性を感じたのであろう、ディキンソンに会

おうと試み、彼女にボストンに出てくるよう何度も要請した。二人の出会いは、結局、1870年に彼がアマストを訪問することによって果たされるのだが、次に引用するのは1869年5月11日付のもの(L330a)で、ボストン招聘の理由の一つとしてエマスの講演をあげている箇所である。

You must come down to Boston sometimes? All ladies do. I wonder if it would be possible to lure you [to] the meetings on the 3^d Monday of every month at Mrs. [Sa]rgent's 13 Chestnut St. at 10 am – when somebody reads [a] paper & others talk or listen. Next Monday Mr. Emerson [rea]ds & then at 3 ½ P.M. there is a meeting of the Woman's [Cl]ub at 3 Tremont Place, where I read a paper on the [Gre]ek goddesses. That would be a good time for you to come [alth]ough I should still rather have you come on some [da]y when I shall not be so much taken up – for my object is to see you, more than to entertain you...

著名なエマス、そして文通相手のヒギンソンの講演を共に聞けるという絶好の機会として提供されたのだったが、ディキンソンはこれに対し、3度目のお断りを入れている。

3) ディキンソンの思い出を記したヒギンソンがエマスに言及 (L342b)

1870年8月16日、ヒギンソンはアマストにエミリを訪ね、その日妻に印象を手紙に記して書き送った。そしてさらに20年後に、会見を思い出して1891年10月号の*Atlantic Monthly*誌に寄稿しているが、その一文の最後がエマスで締めくくられている。

...I could only sit still and watch, as one does in the woods; I must name my bird without a gun, as recommended by Emerson.

この文が書かれ発表されたのは、ディキンソンが亡くなってからであって、彼女のあずかり知らぬところであるが、他でもない彼女本人について、しかも直接会った上での印象に、エマスが関わってくるので取り上げた。

ま と め

このように見てくると、ディキンソンの中におけるエマスとの関わりはあまり数多いとは言えないし、目立った傾倒ぶりなども窺えない。しかし、ディキンソンにとってエマスは重要な存在であったということを示すポイントは抑えてあると言えるのではないだろうか。何といても文学開眼の契機がエマスの詩集であったというのが大きい。この書をくれたニュートンを折にふれ「師」として仰いでいることからして、エマスが常に念頭にあったと思われる。書簡の中でも、その著や詩が言及されて非常に身近にあったことが窺える。ヒギンソンからの初めての返事は、ディキンソンを質問攻めにしたようであるが、その一つが気に入りの詩人、作者であっ

たらしい。ディキンソンは「詩人は、キーツとブラウニング夫妻、散文はラスキンとサー・トーマス・ブラウン」と答えていて、エマソンは入っていない (L261)。好きで読むというより、自分でも気がつかないほどに自家薬籠のものになっていた、エマソンからは吸収したら自分のものへと姿を変えていた、ということかもしれない。たった1例ではあるが、ディキンソンの詩がエマソンの作に間違えられたというのもその現われと解することができる。そして、隣家までエマソンが来ていながら会わなかったというのもディキンソンらしい。「手紙は、肉体という相棒がなく精神だけなので、私にはいつも不滅のように感じられます」(L330)という言葉を残しているディキンソンである。生身の人間ではなく、書物の中のエマソンの精神だけに会っていればよかったのである。

[Notes]

ディキンソンの詩の引用、および詩の番号は次に拠る。

Franklin, Ralph W., ed. *The Poems of Emily Dickinson*. Variorum Edition. 3 vols.

Cambridge, MA: The Belknap P of Harvard UP, 1998. (Fr)

ディキンソンの書簡、その他の引用、およびその番号は次に拠る。

Johnson, Thomas H., and Theodora Ward, ed. *The Letters of Emily Dickinson*. 3 vols.

Cambridge, MA: The Belknap P of Harvard UP, 1958. (L)

- 1 Richard B. Sewall, *The Life of Emily Dickinson* (New York: Farrar, Straus and Giroux, 1974), p.678n.
- 2 Jack L. Capps, *Emily Dickinson's Reading 1836-1886* (Cambridge, Mass: Harvard University Press, 1966), pp.113-14.
- 3 Sewall, *Life*, p.570.
- 4 Capps, *Reading*, p.114.
- 5 Jay Leyda, *The Years and Hours of Emily Dickinson* (New Haven, Conn.: Yale Univ. Press, 1960), II, p.233n.
- 6 Catherine Tufariello, "The Remembering Wine": Emerson's Influence on Whitman and Dickinson" in *The Cambridge Companion to Ralph Waldo Emerson* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1999), pp.175-76.
- 7 Johnson, *Letters*, III, p.928.
- 8 Leyda, *Years*, I, p.351.
- 9 *Ibid.*, p.351.
- 10 Sewall, *Life*, p.115.
- 11 Thomas H. Johnson ed. *The Poems of Emily Dickinson*. 3 vols. (Cambridge, MA: The Belknap P of Harvard UP, 1955), xxix-xxxiii.
12. Alfred Habegger, *My Wars Are Laid Away in Books: The Life of Emily Dickinson*

(New York: Random House, 2001), p.559.